

2018年度 FD 活動の取組み

1. FD 研修会「英語による授業の進行・設計」

講師：根元 邦朗 経済学部准教授
リンジー・モリソン 人文学部助教
垂見 裕子 社会学部教授

日時：2018年6月7日（木） 14時40分～16時10分

場所：武蔵大学6号館6201教室

〈研修会の概要〉

本年度のFD研修会の日程は、昨年度と同様に多くの教員が参加できるようにと6月の教授会の日程に合わせての実施となった。

本年度は、三学部それぞれの特徴を活かしたグローバル教育の授業の進行について研修会を実施した。

最初に経済学部の根元先生から、ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（PDP）について約40分の講演がなされた。次に社会学部の垂見先生から、グローバル・データサイエンスコース（GDS）について講演がなされ、最後に人文学部のモリソン先生からグローバル・スタディーズコース（GSC）について講演がなされた。

講演に先だって、経済学部の根元先生からは、PDPの立ち上げ以来の数年間、多くの課題が明らかになってきた。それらの課題は、主に、（1）如何に学生の英語力を高めることができるか、（2）如何に学生の興味・関心を高めることができるか、（3）如何に学生の理解度を高めることができるか、という3つに集約されるように感じられる。本報告では、これらの課題について触れつつ、授業の進行・設計で気を付けていることについて紹介するとの説明がなされた。

根元先生の講演は、まず、学生へのBig Pictureの提示とともに、PDPの概要及び具体的な授業の進行や試験対策について説明がなされた。続いて、PDPを担当する教員としての難しさ、Things to Consider in Delivering PDP Coursesとして、上記3点の課題について、具体的な学生とのやり取りや事例が紹介された。

次に、垂見先生とモリソン先生からそれぞれのコースについて現状の報告がなされ、各コース特有の課題に加え、3つのコースには共通する課題も多くあることが示された。

研修会後のアンケートにおいては、参考になったとの回答が93%（非常に参考になった46%、参考になった47%）、研修内容の理解度93%（十分に理解できた68%、理解できた25%）、授業改善の参考になった75%（非常に参考になった40%、参考になった35%）との回答が得られた。また、研修時間について適切との回答が79%であり、今後の授業改善につながる研修会になったものと思われる。

最後にアンケートの一部を紹介する。

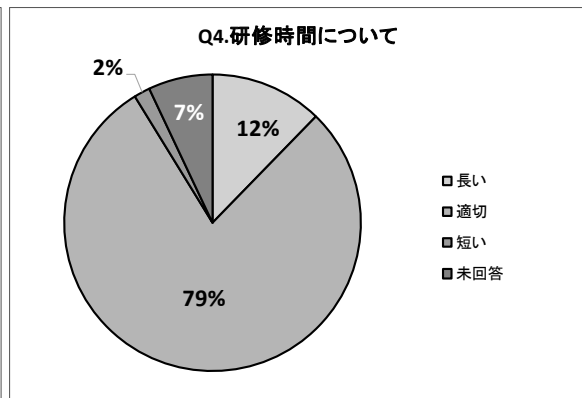
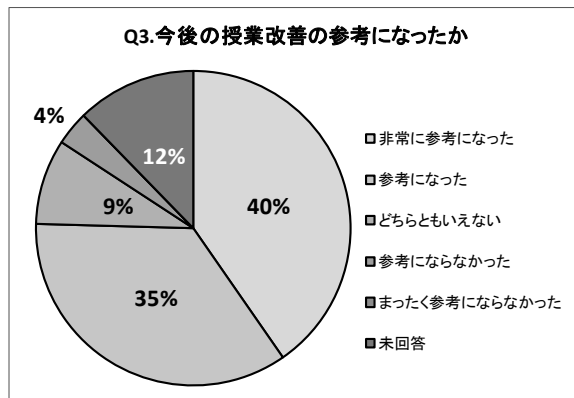
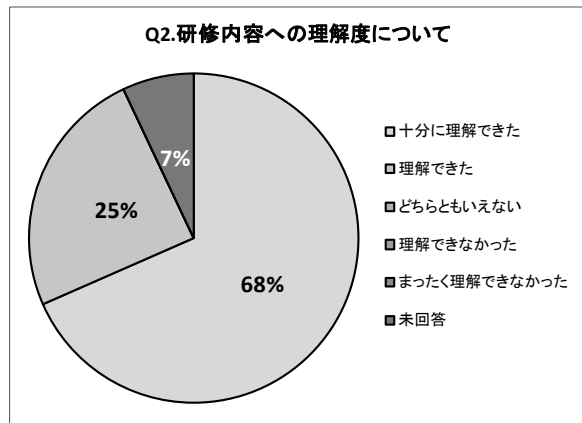
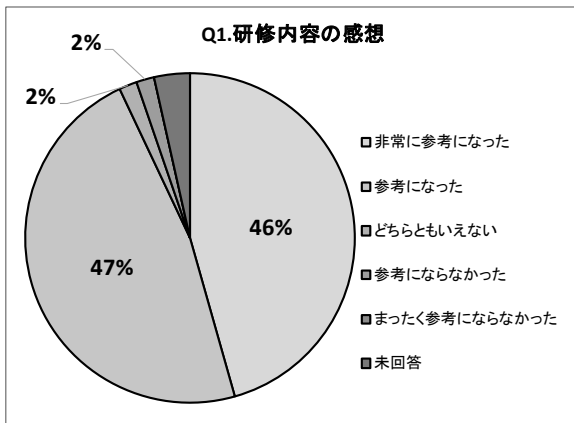
- ・英語での授業としてだけでなく、全ての授業運営者に役立つ内容であったと感じた。
※同様の意見が多数。
- ・他学部（他コース）の話が、参考になった。
- ・Big Pictureをまず提示してから話を具体的に進めるという方法は、とても参考になった。
- ・講義スタイル自体が参考になった。
- ・内容はすごく今後の武蔵の教育のポリシーにかかわってくることなので、非常に参考になった。

（文責：高橋 德行）



研修会の様子

2018 年度 F D 研修会受講者アンケート結果



2. 大学院懇談会

司会：古瀬 公博（経済学部教授）

日時：2018年7月27日（金）13：00～14：30

場所：武蔵大学6号館6102教室

前学期授業終了時の7月27日（金）に、今年度の大学院懇談会が開催され、大学院生7名（経済学研究科1名、人文科学研究科6名）、教員10名、職員6名が参加した。今年度も6月中旬から下旬にかけて「大学院の教育・研究環境に関するアンケート」を実施し、経済学研究科から5名、人文科学研究科から16名の回答を得た。懇談会では、このアンケートの結果をもとに大学院生と教職員との間で具体的に意見を交換した。内容は以下のとおりである。

1. 教育内容・方法

(1) 履修可能な科目について

アンケートの自由記入欄のなかに、「日本思想史」に関する科目の開講要望があった。現在、担当可能な教員が在籍していないため、開講できない状態にあるが、とくに民俗学などを専攻している大学院生からすると、修士1年の時期に「日本思想史」もしくは「日本民俗学」を履修できないというのは履修上問題があるという指摘があった。対応としては、非常勤講師を配当し、開講するということが最も現実的であるという意見が教員側から示された。これはあくまでも一例であるが、履修希望と実際の開講科目のずれは頻繁に生じうるので、今後も継続的に対応策を検討する必要がある。

また、博士後期課程の学生は、博士前期課程の大学院生が履修しなければ、前期課程の科目がそもそも開講されないため、それらの授業を履修する機会が失われるという点が指摘された。今後は、博士後期課程の大学院生も希望を提出すれば、前期課程の科目が開講できる可能性について主に教務部において検討していきたいとの回答が教員側からなされた。

(2) 論文指導について

武蔵大学では大学院生の人数が少ないので、指導教授との関係が1対1になることが多い。そのため、きめ細やかな指導が得られる半面で、いったん関係が悪化すると修復することが難しい。指導内容に不満があっても指導教授には伝えにくいといった問題も指摘された。教員に対して直接要望を出すことも難しいこともあるので、そのような問題を大学側に相談できる体制が整えられることが要望として提起された。

2. 研究・教育支援について

大学院生に対しては、物品購入に使用できる3万円の教育支援費と、それにくわえて調査・学会旅費に使われる旅費補助が3万円支給されている。大学院生から見ると、もちろん多ければ多いほどよいだろうが、他大学と比べる限り、妥当な金額であろうとの回答が大学庶務課からなされた。

3. キャリア支援について

大学院に進学する際に、大学院卒業後にどのようなキャリアがありうるかの情報がキャリア支援課では十分には得られなかったため、今後はキャリア支援課において、大学院生や進学希望者に対してそのような情報が提供される体制を整備してほしいという要望があった。

4. 図書館について

国立国会図書館のデジタル資料送信サービスについては、利用申請の準備を進めているが、国会図書館から提示されている利用条件をクリアする必要があるため、今年度内に準備を進めて、来年度の導入を予定しているとの回答を得られた。

ジャパンナレッジについては、同時アクセス数が限られており、利便性が低いという指摘がなされた。これについても、来年度において同時アクセス数を増やす予定で動いている。

図書館の地下書庫において、パソコンなどを持ち込み、閲覧作業をしたいという意見が聞かれたが、現状、建築上の構造として閲覧作業に適したものとはなっていないので、不便であるが、一時貸し出しの手続きを経て、既存の閲覧スペースを使っていたきたいとの回答であった。

その他、図書館については、細かな要望・意見も含めて多く出されたが、紙幅の関係で、ここでは割愛させていただきたい。

5. 大学院生室について

大学院生室に設置されているプリンターやスキャナーの状態が悪く、また、無線 LAN の状態も芳しくないという設備上の問題が指摘された。無線 LAN については、要望を受けて、情報メディア教育センターから改善を検討するとの回答がなされた。大学院生室の不備については問題が起き次第、各部署に連絡をすれば、迅速に対応することが可能であるので、遠慮なく申し出てほしいと大学院生側に伝えられた。

以上、参加した大学院生は必ずしも多くはなかったが、現状の課題について忌憚のない意見が出され、有意義な意見交換がなされた。今後も継続的に大学院生との意見交換を行い、教育・研究環境の整備を進めていくことが求められる。

(文責：古瀬 公博)

3. FD フォーラム「学生と共に考える授業改善」

司会：高橋 德行（FD 委員長、経済学部教授）、戸塚 学（人文学部准教授）

担当：古瀬 公博（経済学部教授）、戸塚 学（人文学部准教授）、松井 隆志（社会学部准教授）

日時：2018 年 12 月 20 日（木）16:30～18:00

場所：武蔵大学 1 号館 1203 教室

〈趣旨と概要〉

武蔵大学 FD フォーラムは、学生が授業改善に向けて提案を行い、それを受けて学生と教職員がともに授業改善の方途を検討する企画である。FD 活動の中でも、特に学生を主体とするものであり、学生アンケート等では知ることができない生の声を受けて、教職員・学生が一体となって課題について検討することを目的としている。今年度は学生 9 名、教員 22 名、職員 13 名の 44 名が参加して行われた。授業改善の提案を行った学生登壇者は以下の 6 名である。

テーマⅠ：外から見た武蔵大学（留学経験から）

- 1、経営学科 4 年 萩原綾音
- 2、ヨーロッパ文化学科 3 年 大沼璃沙
- 3、メディア社会学科 4 年 鈴木朋子

テーマⅡ：1 年生の時に学んで役に立ったこと、教えてほしかったこと（初年次教育）

- 4、日本・東アジア文化学科 3 年 能城日向子
- 5、社会学科 4 年 島田善太
- 6、経営学科 3 年 瀬尾雄一

本年度のフォーラムでは、指定テーマ二種類（1、外から見た武蔵大学（留学経験から） 2、1 年生の時に学んで役に立ったこと、教えてほしかったこと（初年次教育））を設定して学生からの提案を募集した。指定テーマ 1 の提案が 3、指定テーマ 2 の提案が 3 となった。

指定テーマ 1 は、昨年度フォーラムからの流れを引き継いだものである。武蔵大学では現在グローバル教育の拡充に力を入れており、ロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（経済学部）に加え、グローバル・スタディーズコース（人文学部）、グローバル・データサイエンスコース（社会学部）が昨年度より新設された。そうした流れを踏まえ、海外に留学し、海外の大学と武蔵大学双方で学んだ学生に、武蔵のカリキュラムに対する提言を行ってもらった。指定テーマ 2 は、武蔵大学の伝統である「ゼミの武蔵」を踏まえ、ゼミでの教育を一層充実させるために設定された。

フォーラムは 16:30 に山崎学長による開会挨拶によって開会され、続いて高橋委員長の司会のもと学生六人による授業改善に関する提案がパワーポイントを用いてなされた。その後、フォーラム参加者全員によるディスカッションが 17:10 より始められた。昨年度に引き続き、一列の円ではなく、椅子をラフに何重かで配置し、発言がしやすい雰囲気作り・椅子の増減がしやすい形をとった。

本年度は 12 月末にフォーラムを開催したが、当日は 3 年生の就職活動のイベントと重なるという行事の重複があり、日程調整については今後考慮する必要がある。

〈提案および論点〉

1、外から見た武蔵大学

留学した大学によって論点は異なったが、留学先の大学では講義の他に教員や学生同士でのゼミナール形式の授業がセットになっていたこと、教員からの課題のフィードバックが音声および文字で丁寧になされたこと、教員が学生に気軽に声をかけ、学生間での議論が盛り上がっていたこと、それに比べて武蔵のゼミや講義は改善の余地があるのではないか、という問題提起がなされた。具体的には、ゼミのあり方の多様化や発表の様態の自由化、複数の学年が参加できるゼミの提案、少人数教育の強化やフィードバックの強化、総合科目等の講義科目における明確かつ共通した試験基準の設定による単位の実質化、グループワークの強化、1～4年次までの授業の積み重ねというカリキュラムの構造の明確化、とりわけ4年次における授業履修の推奨などの提案がなされた。

2、1年生の時に学んで役に立ったこと、教えてほしかったこと（初年次教育）

初年次教育については、1年次の基礎ゼミナールや3S上の卒論の手引きなどによって、レポートの書き方や資料の収集の仕方、註釈の付け方などの具体的な指導が行われることが、高校から大学へと進学してきた学生にとっては役に立ったという指摘がなされた。その一方で、初年次に提示されていなかった条件が準備ゼミナールの選択ガイダンスの時に提示されるといった問題点、1年次から組んできた授業計画を時に組み直さなければならないことなどの問題点も指摘された。その上で、四大学間の相互的な授業履修の強化、ゼミ選択の基準の明確化、学生が入学前に希望した分野のゼミの恒常的な開設などの提案がなされた。



プレゼンテーションの様子

〈討議〉

前半部の学生による提案を踏まえて、全体で討議がなされた。まず、登壇者への質疑（教員によるフィードバックの方法や、講義と並行したセミナーの開設のあり方など）がなされたあと、教員の側や教務部から学生の提案に対する回答がなされ、提示された論点を踏まえた自由討議となった。

討議では、4年間を通した授業履修という提案と実際の学生の意識の差異や就職活動などの現実との比較検討、1年次に自分が希望する分野の科目をとりたいが必修などと重なってしまうという問題点についての議論、試験基準の明確化や共通化をめぐる議論、講義と講義の間に議論をしたり学習したりするスペースの必要性の提唱などがなされた。

〈所感・今後の課題〉

いずれの登壇者からも率直な提案や発言がなされ、議論の姿勢に日頃のゼミ学習での蓄積が感じられた点が印象的である。また、当日参加した1年生からも意見や希望を積極的に述べる姿勢が見られた。

一方で、学生から提案された論点について、その場で議論を深めていくという形はなかなかとれず、学生からの意見の聴取にとどまってしまった印象もある。ただし、提示された論点以外に、教員側から日頃聞きたいと思っていた質問が投げかけられ、それに対する回答がなされる中で議論の広がりが見られた点はよかった点である。

学生の参加人数がきわめて少ないという点が問題点であり、どうしても登壇者を中心とする学生と教員とのやりとりという形になってしまったと言える。今後は一般の学生にどのように参加してもらえるか、工夫と検討を行う必要がある。また、学生からの提案に対してどのようなフィードバックを行っていくのか、委員会で検討する必要があるだろう。

(文責：戸塚 学)



学生と教職員による討議の様子

4. 教員 FD 研修報告 (1)

参加者：森 健一（人文学部准教授）

テーマ：第4回能動的学習の教員研修会

日時：2018年8月24日（土）

場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

主催：一般社団法人全国大学実務教育協会

研修会の主なプログラム

- (1) モデル授業「オリンピックと人間形成」加藤澤男先生（筑波大学名誉教授）
世界のトップアスリートによるモデル授業。オリンピックの価値と人間教育の重要性について講演。
- (2) テーマ別研究会 テーマ3「学修成果と評価」（テーマ1～4の中で選択）
大学に求められている3つのポリシーのうち、学生が入学から卒業までに修得すべき能力（学修成果）を明確にし、しかもそれがどのように測定され、どのくらい達成できたかを客観的に評価する手法を研究する。

〈研修概要〉

プログラム（1）では、「オリンピックと人間形成」というタイトルで加藤澤男先生が講演された。加藤澤男先生は、体操競技を専門競技とされており、1968年・72年・76年と3大会連続でオリンピックに出場し、8個の金メダルを獲得されている。そして、研究領域は運動学を専門とされている。運動で学習を考えてみると、物ではない人の運動では、運動のでき方に特徴があること（運動の発生）、他人に代わって覚えてもらうことのできない個人完結の運動であること（自己運動）、毎回違う運動が発生すること（運動の一回生）、生活の中の日常運動や仕事での運動など意味や価値が結びついていることから、完璧な演技そのものや完璧な演技を繰り返すことが非常に難しいとのことであった。そして、「人の運動は上手くもなり、また、下手にもなる」という言葉が印象的であった。人の動きを考えれば、興味、真似、体験、工夫、訓練、慣れなどは欠くことができないものである。運動の発生は受動総合であり、からだのすべてから成り立っていることを強調されていた。私は、体育領域の教員であるため、今回の加藤澤男先生の講演内容は、直接的に関係することが多く、受講者として得るものが非常に多かった。

続いて、プログラム（2）ではテーマ別研究会ではテーマ毎にグループとなり、各大学で実施している内容についてそれぞれが説明をした。私が選択したグループは「学修成果と評価」であり、7名の先生方と情報交換を行った。事前に準備課題が課されており、テーマ別研究会でグループに発表する事例の概要、事例の中で工夫した点、事例の中で自らが捉えている課題の3点を事前準備シートに作成し、グループ内でその内容を共有した。カリキュラムツリー、カリキュラムマップ、ルーブリック、独自のコメントペーパー、大学独自の育能力を示す指標（大手前短期大学:CPLATi と C-PLATS 自己診断）など、一般的なものから大学独自のものまで、多様に評価の方法、手法について共有できた。しかし、評価については学生の主観的な評価と教員による評価に不一致が生じることも懸念された。そのため、評価方法について学生も教員も学ぶ機会を設ける必要性も感じられた。いずれの大学および教員においても、専門分野に関わらず、学生の能動的学習のために試行錯誤しながら、より良い授業を展開しようと努力されていた。

（文責：森 健一）

4. 教員 FD 研修報告 (2)

参加者：玉置 佑介 (社会学部助教)

テーマ：第5回 能動的学修の教員研修リーダー講座

日時：第1回 2018年8月25日(土) 9:30~17:30 … 集合研修Ⅰ (基礎)
第2回 2018年9月22日(土) 9:30~17:30 … 集合研修Ⅱ (実践応用)
第3回 2018年10月27日(土) 9:30~17:00 … 集合研修Ⅲ (総合演習)

場所：第1回および2回：アルカディア市ヶ谷 (私学会館)
第3回：東京ガーデンパレス

主催：一般社団法人 全国大学実務教育協会

〈研修の到達目標〉

研修の到達目標は、講座ワークシート p.5「能動的学修のための教員評価表 (ルーブリック)」における「評価観点」より抜粋し、以下に提示する。

- (1) 大学の教育改革における能動的学修の意義を理解している。
- (2) 学生を能動的学修へと誘う技法・方法を習得している。
- (3) 能動的学修の授業デザインとその運営の仕方を習得している。
- (4) 教員として能動的学修の実践力を向上させることができ、学生の成長と共に歩むことができる。

なお、上記「能動的学修のための教員評価表 (ルーブリック)」は「熟達レベル」「有能レベル」「学習途上レベル」の3段階に分かれている。各項目3点ほどのチェック項目が用意され、研修期間中の自身の到達段階の指針となるものであったことを付記しておく。

〈主なプログラム〉

第5回「能動的学修の教員研修リーダー講座」の主なプログラムは次の通りである。

【1日目】

- ・ オリエンテーション／インタビューによるメンバー紹介
- ・ テキスト共通理解の「理解促進テスト」の活用方法の習熟
- ・ 講義「能動的学修とは」「反転学習とは」
- ・ 問題意識をひろげる「ワールドカフェ」の活用方法の習熟
- ・ 学生を能動的学修へと誘う「事例研究」の実施方法の理解 (個人ワーク／グループワークの併用)
- ・ 「ブレインストーミング」の活用方法の習熟

【2日目】

- ・ 課題の発表 (グループ内でのプレゼンテーションと全体プレゼンテーション)
- ・ 学内体験学習の方法 (ペアインタビューにおける質問項目の準備／データ収集／データ整理 [カード化] / データのまとめ [模造紙による構造化] / 討議 / 発表)
- ・ 講義「効果の上がる授業デザイン」

【3日目】

- ・ 作成してきた授業デザインシートをグループ内で発表し、相互にコメントを記入
- ・ シートをもとにグループディスカッションを実施し、改善点と参考にすべきと思った事柄について意見交換
- ・ 上記の作業を通じて、自身のシートを修正（個人作業）
- ・ グループ内の課題発表の中から代表作品を選出し、他グループの参加者を学生とみなして演習を実践する（※当方のシートの内容が採用され、演習を実施した）
- ・ 各グループの発表および質疑応答、グループ間の相互コメントの作成

なお、各回には「課題」が用意されていた。初回の課題は、①事前学修としてテキスト『能動的学修の教員リーダー講座テキスト』の精読、②テキスト内「理解促進テスト」への回答と用紙への記入であった。つづく2回目の課題は、初回の研修で学修した学びの技法を自身の講義に工夫を加えて活用し、その結果をレポートにすること、②「能動的学修のための教員評価表（ルーブリック）」によって自己評価を実施し、評価シートに結果を記入することであった。最後の3回目の課題は、①具体的にゼロから授業を計画しこれまでの学修内容をふまえてシラバスを作成すること、②その授業デザインの手順書と学生用配布資料を作成すること、③上記の実施を通じて得られた体験をレポートにすること、④「能動的学修のための教員評価表（ルーブリック）」によって自己評価を実施し、評価シートに結果を記入することであった。

〈研修全体の概要と得られた知見について〉

今回参加させて頂いた一般社団法人全国大学実務教育協会主催の第5回「能動的学修の教員研修リーダー講座」は、2018年8月末から10月末にかけて3回実施された。全国34の大学からさまざまな専門分野の教員が参加し、文系理系問わず6グループに編成され活発な意見交流が行われた。

当方はDグループに配属され、甲南大学経済学部教授の柘植隆宏先生、東洋学園大学人間科学部教授の福田佳織先生、宇都宮文星短期大学地域総合文化学科准教授の工藤敬子先生、近畿大学通信教育部でキャリアコンサルタントをされている東野國子先生の4名と研修をご一緒させて頂いた。上記、4名の先生方は当方と比べ、教育キャリアも実践経験も豊富な方々であり、能動的学修という観点以外の側面でも示唆に富むご指摘をして頂いた。とくに、各大学や学部による学生気質の相違や、それにもとづく講義手法の臨機応変な対応等、能動的学修以前の大学における教育そのものについて考えさせられる濃密な経験をさせて頂いた。

また、能動的学修という観点では、90分の講義時間を「20分+5分の個人作業+5分のグループ討議」に分けて講義を実践されている柘植先生の取り組みに感銘を覚えた。履修者の集中力の継続という観点から90分をおおまかに3つのパートに区分し、座学形式の講義時間を20分に限定して実施することで学習効果を高めているとのことであった。この手法については、当方が担当している「社会調査方法論基礎1/メディアリサーチA」でも実践応用を試みた。その結果、提出されたリアクションペーパーからの推測ではあるが、講義内容の習熟度に明らかな差が見受けられた。とくに、すぐさまグループ討論とするのではなく、まずは自分自身との対話の時間を設定し、20分間の座学での学修内容と関連させ、そのうえでグループでの話し合いに進むことの意義に気づかされた。

このように、さまざまな専門分野の教員からの意見交流を経て、本講座を受講する前と後とで自身の講義形式にも明らかな変化がもたらされたのが収穫であった。それと同時に、これまで自身が実施してきた講義内容には部分的に能動的学修の側面があることにも気づかされた。例えば、当方が担当している「質的社会調査方法論」における「ブラインドワーク」（質的社

会調査における基本動作「みる」「きく」「しる」「する」の意識化のために2人1組になり、学内を歩くもの。一方が目を瞑り、もう一方はそのサポートや声かけをする）などは広義の能動的学修の「体験学修」に位置づけられうる点など、得られた知見は数知れない。

〈今後の課題〉

当方の担当する講義科目は方法論科目が多く、とくに調査方法論科目は座学中心の講義内容に偏り、受講学生たちの学修意欲を持続させるための創意工夫が欠かせない。今後は、方法論科目における「能動的学修」をいかに抽象的な講義内容に取り込んでいくかをよりいっそう意識し、理論的・方法論的内容に具体性を持たせていく講義スタイルの確立を模索していきたい。ただし、問題点としては大講義における「能動的学修」の可能性と共にその難しさをどのように考慮するかが肝要であることにも気づかされた。初回の講座で学修した相互インタビューやワールドカフェ、ブレインストーミング等の「効果」については理解したものの、その「効果」をより発揮させるためにはかなりの事前準備や入念な想定にもとづく配布資料の工夫が必要であると感じた。くわえて、大人数履修者を毎回小グループに分けていく際の創意工夫も求められることから、教員負担と実際の「効果」の観点をも考慮しながらその可能性を継続的に模索していくこととしたい。

一方、これまでの経験からも言えることであるが、多様なニーズを持った学生への対処や障害のある学生への対応という点で「能動的学修」は難点を抱えていると言わざるを得ない。過去、自身の講義の「ブラインドウォーク」においては、電動車いすの当事者の履修があった。その際は、当方がそのサポートを実施したが、学生同士の相互の学修経験が損なわれたことによって履修者間の学修内容に差異が生じてしまったという経緯がある。今後は、講義内容の情報保障や合理的配慮の観点を重視しつつ、多様なニーズを持った学生への対処や障害学生に対する「能動的学修」の可能性と困難性について、積極的に考究していく姿勢が重要ではないだろうか。

以上、本講座を受講して得られた課題を提示してきた。引き続き、自身の講義に「能動的学修」を積極的に導入していくと同時に、その「効果」を推し量るべく履修学生からのリアクションをその都度聴取する機会を設けていきたい。現状においては、FDによる「授業評価アンケート」などで間接的にではあるが、それを伺い知ることはできる。しかしながら、より直接的な影響を履修学生から聴取することで自身の「能動的学修」の影響を即座に確認し、結果を講義内容に結実させていく努力を惜しむべきではないと考えている。

このような想いに至るようになったのも、今回、能動的学修の教員研修リーダー講座に参加した成果のひとつであると考えられる。したがって、これ以降も「能動的学修」に関する知識の習得と学修活動に積極的に従事し、履修学生のニーズの把握とともに、より効果的な学修デザインの構築と実践に邁進していくこととしたい。

(文責：玉置 佑介)

5. 教務FD報告「卒業論文・ゼミ論文」等のルーブリック策定

矢田部 圭介（教務部長）

2018年9月20日の大学協議会にて「第三次中期計画に関する諸施策の見直しについて」という文書が審議確定された。このなかには、第三次中期計画への新規追加項目として「教育課程の見直しに向けたアセスメント・ポリシーの策定」があげられている。

この第一歩として、本年度中に、アセスメント・ポリシーを策定し、次年度4月より公表・運用できるようにすることをもとめられている。しかし、アセスメント・ポリシーを公表・運用するためには、各項目の評価基準がある程度定まっていなくてはならない。とくに、本学の学生の最終的な学修成果の評価方法の中核をなす「卒業論文・ゼミ論文」等の評価基準（＝ルーブリック）は、アセスメント・ポリシーの公表・運用開始時点で明示されている必要がある。

ここでは、本年度実施した、卒業論文・ゼミ論文等のルーブリック策定に関して報告する。

ルーブリックは、今後の点検・評価過程を鑑み、ディプロマ・ポリシーに対応するかたちで設定する必要がある。実際に学生を対応していく場では、各学部や学科の学問的背景とディプロマ・ポリシーにあわせたルーブリックを用いた方が適当であるが、その大元として、まずは、大学全体のディプロマ・ポリシーに対応したルーブリックを策定する必要があった。

現状の大学のディプロマ・ポリシーは以下のように整理できる。

大学のディプロマ・ポリシーの整理

【1】リベラルアーツに基づく幅広い教養と専攻分野に関する十分な知識	【1】知識	【1】①幅広い教養
		【1】②専門的知識
【2】「自ら調べ自ら考える」主体的かつ批判的な学習態度	【2】学習態度	【2】①主体的な学習態度
		【2】②批判的な学習態度
【3】異文化を理解し多様な他者と協働して社会に貢献できる対話力・共感力	【3】他者と協働する力	【3】①対話力
		【3】②共感力
【4】グローバルな思考力と、これを支える十分な外国語運用能力	【4】グローバルな視野	【4】①グローバルな思考力
		【4】②外国語運用能力
【5】学修の成果や学習態度を実社会で生涯をつうじて活用できる実践力	【5】学びを活かす力	【5】学びを活用する実践力

こうした大学のディプロマ・ポリシーにあわせて作成したのが、次ページの「卒業論文・ゼミ論文ルーブリック（大学全体版）」である。これは、2019年1月17日の各学部の教授会で承認された。

この大学全体版の「卒業論文・ゼミ論文ルーブリック」をもとにして、学部・学科ごとに、それぞれのディプロマ・ポリシーに対応した「卒業論文・ゼミ論文ルーブリック」の作成を行った。これは、2019年2月11日の各学部の教授会で承認された。なお、各学部の独自の特徴ある卒業研究に関するルーブリックや、PDP、GSC、GDSにおける「卒業論文・ゼミ論文ルーブリック」も、当面は、この各学部・学科のルーブリックを準用することとした。

現状では、「卒業論文・ゼミ論文ルーブリック」の活用の具体的な方法は、各学部・学科の判断に任せることとしている。今後、それぞれの取り組みの具体例を蓄積しながら、ルーブリック活用のスタンダードを作成することが課題となると思われる。

卒業論文・ゼミ論文ルーブリック（大学全体版）

大学のディプロマ・ポリシーとの対応	評価項目	S 特に優れている	A 優れている	B 良い	C 合格と認められる最低限	D 合格基準に達していない
[1] ②専門的知識	専門分野の知識	専門分野に関する知識を十分に修得し、適切に整理できている。	専門分野に関する知識を修得し、整理できている。	専門分野に関する知識を修得している。	専門分野に関する初歩的な知識の修得にとどまっている。	専門分野に関する知識を修得していない。
[1] ②専門的知識 [2] ②批判的な学習態度 [4] ②外国語運用能力	先行研究	先行研究を把握し、要点をまとめて批判的に説明できている。	先行研究を把握し、要点をまとめて説明できている。	先行研究を把握しているが、要点をまとめた説明が不十分である。	先行研究を把握しているが、要点をまとめて説明できていない。	先行研究を把握していない。
[1] ①幅広い教養 [1] ②専門的知識 [4] ①グローバルな思考力 [5] 学びを活用する実践力	問題設定	先行研究をふまえて適切な問題設定がなされており、その社会的な意義が明確にされている。	先行研究をふまえて適切な問題設定がなされている。	先行研究をふまえて適切な問題設定がなされていない。	先行研究をふまえて問題設定がなされている。	問題設定ができていない。
[1] ②専門的知識	資料・データ	必要な資料・データが、適切に収集・整理され、分析されている。	必要な資料・データが、適切に収集され、分析されている。	必要な資料・データが、収集され、理解され、分析されている。	必要な資料・データの収集・理解・分析が試みられている。	必要な資料・データが、収集されていない。
[1] ②専門的知識 [2] ②批判的な学習態度	考察	資料の分析に基づいて、論理的整合性をもち、ある程度の独創性がみられる考察がなされている。	資料の分析に基づいて、論理的整合性をもち、考察がなされている。	資料の分析に基づいて、おおむね論理的整合性のある考察がなされている。	資料の分析に基づいて、考察がなされている。	資料の分析に基づいた考察がなされていない。
	基本的技術	出典の明示	出典箇所が、適切な書式で、全て明示されている。	出典箇所が、ほぼ適切な書式で、ほぼ全て明示されている。	出典箇所の明示には、比較的確切な書式が用いられているが、若干の欠落がみられる。	出典箇所が、明示されていない。
[1] ①幅広い教養		参考文献リスト	参考文献リストが適切な書式で欠落なく整備されている。	参考文献リストが、ほぼ適切な書式で、ほぼ欠落なく整備されている。	参考文献リストの書式が適切でないが、若干の欠落が散見される。	参考文献リストが整備されていない。
		論文の書式	指定の書式に全て従っている。	指定の書式にほぼ全て従っている。	指定の書式に従っていない箇所が若干みられる。	指定の書式に従っていない。
[1] ①幅広い教養 [4] ②外国語運用能力 [5] 学びを活用する実践力	表現	文章表現	内容的な確信に伝え、日本語(外国語)としても優れた文章である。	内容をほぼ的確に伝えるが、日本語(外国語)として違和感のある箇所が若干見られる文章である。	内容をほぼ的確に伝えるが、日本語(外国語)として違和感のある箇所が散見される文章である。	内容を適切に伝えておらず、日本語(外国語)として違和感のある箇所が非常に多い。
		誤字脱字	誤字脱字がない。	誤字脱字がほとんどない。	誤字脱字が散見される。	誤字脱字が非常に多い。
[2] ①主体的な学習態度 [2] ②批判的な学習態度	研究への取り組み	主体的かつ批判的な研究態度	研究には積極的に関わり、先行研究をふまえて批判的に努力している。	研究には積極的に関わり、先行研究をふまえて批判的に努力している。	研究への積極的な取り組みに若干欠け、先行研究をふまえて批判的に努力していることがあまりなかった。	研究への積極的な取り組みに欠け、先行研究をふまえて批判的に努力していることがなかった。
[3] ①対話力 [3] ②共感力		ゼミでの対話を通じた研究活動	ゼミでは、他者の意見を積極的に自身の研究の参考にし、他者の研究に建設的な意見を多く提供した。	ゼミでは、他者の意見を積極的に自身の研究の参考にし、他者の研究に意見を多く提供した。	ゼミでは、他者の意見を自身の研究の参考にするが、他者の研究に意見を提示することも、あまり多くなかった。	ゼミでは、他者の意見を参考にせず、他者の研究への関心も示さなかった。